

# 初期の中国社会学と日本との関係

星 明

はじめに

- 1) 中国における社会学受容の社会的背景
  - 2) 初期の中国社会学と日本
    - a) 日本の社会学書の中国語訳
    - b) 日本への中国人留学生
- 付録 「滬東公社の活動について」

は じ め に

この小論は、1902年から1937年にかけての中国社会学への日本の影響をみたものである。1902年としたのは、章炳麟が日本の岸本能武太の社会学を翻訳し、出版した年であるからである。中国にとって、この本は外国の社会学の著作が訳された最初のものである。1937年としたのは、この年7月日中戦争が始まり、そのために北京、南京、広州にあった社会学部をもつ13大学が学舎を雲南省、四川省、貴州省に移転させたり、5巻2号まで続いた中国社会学社発行の季刊誌『社会学刊』（1929年創刊）が停刊を余儀なくされたからである。

中国社会学への日本の影響についてのアプローチは、1)外在的分析と、2)内在的分析とに分けられる。前者には、中国で日本社会学の著作がどれほど翻訳されたか、中国人が日本の大学でどれほど社会学を学んだか。中国の大学にどれほど日本留学経験者がいるか、後者には、中国社会学に日本社会学の重要な研究課題、研究の流行がどれほど受容されたか、といった問題が含まれる。ここでは、外在的分析を行なう。

従来、中国社会主義と日本との関わりは、日本の多くの研究者によって、述べられてきたが、中国社会学と日本との関わりについてはそれ程研究がなされておらず、空白になっている。中国においても、中国社会学史を専門にする研究者は少数であるし、ましてや日中の社会学交流史それ自体をあつかっていない。『中国社会学史』（1987年）の著者である楊雅彬は、「解放前中国社会学史に関する研究は非常に希薄であったし、解放後もさらに社会学の研究は30年間、中断した。それゆえ、中国社会学史の研究は……一つの処女地であるが、しかし開拓の必要な荒地である」と研究の遅れと研究の必要性を述べている<sup>1)</sup>。また、上海在住の数少ない中国社会学史の研究者であり『中国社会学史資料選編』（1986年）の編者である陳樹徳と許

妙発も「中国社会学史はなお開拓が待たれる処女地である」という<sup>2)</sup>。

1991年4月からの上海社会科学院社会学研究所での研究の機会を得られた筆者は、日本では入手できない新中国成立以前の中国社会学の多くの著作、雑誌に接することができたし、また新中国成立前のキリスト教会立大学の社会学部で学び、コロンビア大学に留学した老学者からも当時の大学、社会学部の社会的活動の例（付録）、教授、外国留学などについて聞取りをすることができた。それらから、初期の中国社会学と日本とは、殊の外関わっていることがわかった。たとえば、群学に代わって、日本語から輸入された社会学という名称が中国に定着したのをはじめ、日本の社会学書の数多くの翻訳、また北京大学で、1916年に、中国人として初めて社会学の講義を行った康宝忠（1884～1919年）<sup>3)</sup>も日本の早稲田大学の卒業生であったことなどである。それゆえ、この小論の目的は初期の中国社会学と日本との関わりの未論究の空白を埋めることにある。

### 1) 中国における社会学受容の社会的背景

中国にとっても、日本と同様に、社会学は外来の学問であった。西洋の社会学を中国が受容したのは、中国の社会を変革するために必要だったからである。進化論およびそれに裏付けられた社会学が要請されたのである。諸外国と同様に中国のばあいも、社会学の受容は社会の時代的背景と密接に関連している。それゆえ、当時の中国社会の状況をごく簡単にみておきたい。

19世紀中葉から20世紀はじめにかけて、中国は悉く外国との戦争に敗れた。第一次アヘン戦争（1840～42年）、第二次アヘン戦争（1856～60年）、中仏戦争（1884～85年）、日清戦争（1894～95年）のすべてに敗れた中国には、列強によって領土分割すらもされかねないという危機があった。この間、太平天国（1851～64年）の乱という被支配者からの異議申し立ては清国政府をゆさぶった。また、義和団（1898～1901年）の外国人に対する排外運動の失敗は、中国の主権すら脅かされるという大きな負債を背負った。このような国家の危機的状況の救うのは維新しかなく、維新をしようとすれば外国に学ぶ必要があった。

ここで一つのモデルになったのが日本である。康有為が光緒帝にあてた上書とともに献上した4冊の本のなかには自著『日本変政考』もあった。その序のなかで康有為は「日本は欧米に学び、30年で成功を得た。中国は土地も広く、人口も多いので、もし近くの日本に学べば、10年以内で世界に知られる強国になる」と述べている<sup>4)</sup>。貝塚茂樹はいう「当時の中国の革新論者は康有為から黄興にいたるまで、多少のちがいはあっても、日本の明治維新をモデルとして、憲法を制定し、民主主義政府をつくり、近代化をすすめることをめざしていた。清末政府は科举制度を廃止して、学校をたてて、まず近代化にあたる人材を養成するため、海外に多くの留学生を送った。中国に近く、しかも近代化のモデルと考えられていた日本には多数の留学

生が殺到し、その当時、東京には八千人をこえる中華学生が滞留していたといわれる<sup>5)</sup>。また、韓明漢も「日本は明治維新後、欧米を目指して努力し、非常に大きな成果をえた。中国の革命的進歩人も志をもつ青年も続々と日本にわたり、革命の真理と富国強兵の手腕を学んだ。……日本は中国からも近く、清朝に反対する革命家にとってもっとも近い逃げ場所であったし、留学の費用も安くすんだ」という<sup>6)</sup>。救国のみちを外国にもとめたこと、数十年前に維新を行なった日本をモデルにしたことから、また現実的には同じ漢字を使い、安く行ける日本から学問や思想が中国に伝わった。このなかに、社会学も社会主義もあった。当時、社会学は社会進化論をベースにしたH. スпенサーの社会学が主流であったが、進化論はブルジョア革命を支える理論的根拠を提供した。

しかし、やがて、1909年設立の庚子賠償奨学金（庚款奨学金）による庚款留学によって、中国人留學生の主流はアメリカに吸収されていくことになる。もちろん、日本側にも中国人留學生を帰国させしめた要因があった。一つは1905年清国政府の要請を受けて日本政府が公布した「清国留學生取締規則」による進歩的學生の帰国（帰国者2,000名）である。これは当時の中国人留學生8,000名の25%にあたる<sup>7)</sup>。他の一つは1918年の「日中軍事共同防敵協定」に反対する多数の學生の帰国である<sup>8)</sup>。

アメリカは、1844年、中英間の南京条約（1842年）に準じた条約を締結し、カトリック、プロテスタントの布教権も承認された。これはやがて、宗教事業、慈善事業、文化事業と推し広げられた。それが、燕京、協和、匯文、聖約翰、金陵、東吳、之江、湘雅、華西、嶺南の多くの有力な大学の設立である<sup>9)</sup>。いわゆる教会系大学の社会学期に移っていった。したがって、初期の中国社会学に日本が主としてかかわった時期は、1902年から五四運動の前年の1918年の16年間という極めて短期間であった。

## 2) 初期の中国社会学と日本

### a) 日本の社会学書の中国語訳

1898年から1903年にかけて、中国の知識界は西洋の民主主義の学説紹介のブームであった。ルソーの『社会契約論』（中江兆民訳）が戢元丞・楊廷棟・楊蔭杭・雷奮らによってはじめて中国語に訳されたのを始め、モンテスキューの『法的精神』が張相文<sup>10)</sup>によって日本語訳から転訳された。また、ミルの『自由論』、スペンサー、ベーコン他23冊が翻訳されている。革命史の著作は19冊のうち12冊までが日本語から訳されている<sup>11)</sup>。このように民主主義学説の主要なものは、日本で学んだ中国人留學生によって翻訳、紹介された。1902年から始まった社会学書の翻訳、紹介もまったく同じ状況であった。楊雅彬も「……辛亥革命（1911年）以前は、敵愾が直接ヨーロッパの社会学を紹介したことを除けば、その他の社会学の本はすべて日本語から訳されたものであった……」という<sup>12)</sup>。ここで、日本の社会学著作の翻訳リストを作成して

初期の中国社会学と日本との関係

おきたい。

表 1 日本の社会学著作の中国語訳

著 訳	者 者	原 訳	書 題 名	発 行 所	発行年
岸本能武太 章炳麟		社会学 社会学		広智書局	1902
有賀長雄 訳者名なし		族制進化論 族制進化論		上海広智書局	1902
Giddings, F. H 市川源三 呉建常		社会学提綱			1903
遠藤隆吉 欧陽鈞		社会学 社会学			1911
建部遯吾 湯一鶚		普通理論社会学綱領			1907
訳者名なし		社会学		上海作新社	1903
訳者名なし		社会学原理		上海国民日報掲載	1903
遠藤隆吉 賈寿公		近世社会学		泰東書局	1920
加田哲二 劉叔琴		社会学概論		開明書局	1930
高田保馬 杜季光		社会学総論		商務印書館	1930
高田保馬 伍紹垣		社会学概論		華通書局	1931
加田哲二 李培天		近世社会学成立史		啓智書局	1929
鈴木栄太郎 韓雲波		農村社会学史		正中書局	1944
米田庄太郎 林肇民		都市論		新生命書局	
関栄吉 張資平・楊逸棠		文化社会学		楽群書店	1930
Tönnies, F. 波多野鼎 楊玉宇		Gemeinschaft und Gesellschaft 共同社会与利益社会		太平洋書局	
新明正道 袁業裕		国民革命之社会学		商務印書館	1938
那須浩 劉 鈞		農村問題与社会思想		神州国光社	

出所：孫本文『当代中国社会学』，1948年，勝利出版公司，付録，韓明漢『中国社会学史』（13），1987年，天津人民出版社，37ページおよび楊雅彬『中国社会学史』，1987年，山東人民出版社，27ページから作成。

b) 日本への中国人留学生

日本大学へ留学し、日本留学組のなかでももっとも活躍した一人である李劍華は、その著『社会学史綱』（1930年）の序で、Leopold von Wiese（の著 *Soziologie: Geschichte und Hauptprobleme*, 1926）と岩崎卯一（の著『社会学序説』, 1928年）の二人に謝辞を述べている。かれは、岩崎の西洋の社会学説の解説を自著に取り入れている。

李劍華の著書に取りあげられた日本の社会学者は乗竹孝太郎、有賀長雄、外山正一、岸本能武太、浮田和民、十時弥、樋口秀雄、建部遯吾、遠藤隆吉、小林郁、米田庄太郎、高田保馬、小松堅太郎、岩崎卯一、新明正道、杉山栄、松本潤一郎、川辺喜三郎、杉森孝次郎、加田哲二、赤神良譲、今井時郎、下地寛令、関栄吉、井森陸平、若宮卯之助、布川静淵、三宅雪嶺、加藤弘之、元良勇次郎、高木正義、富尾木知佳、岡百世、武井悌四郎、高桑駒吉、藤原勘治、円谷弘、桜井庄太郎である。かれは、明治期、大正期および昭和期の日本の社会学の特徴を「甚だドイツの分析的形式社会学に偏っている。それゆえ、日本の社会学は理論面での建設に傾注している。ややもすればアメリカの応用社会学を詰まらないものと考えた。これはあるいは東洋人の特徴なのだろうか」と述べている<sup>14)</sup>。

表2 日本に留学した中国各大学社会学教授（民国36（1947）年12月調査）

姓 名	本 籍（籍貫）	勤 務 大 学	留 学 先
1 王 克	四 川 広 東 陝 西 広 東 河 北 湖 南 河 南 広 東 浙 江	社会教育学院	日本大学  早稲田大学
2 李 劍		前復旦大学	
3 岑 梧		中山大学	
4 康 宝		前北京大学	
5 劉 忠		中山大学	
6 及 薬		社会教育学院	
7 鄧 深		前中央大学	
8 簡 貫		前河南大学	
9 鄭 三		貴州大学	
10 魏 重		輔仁大学	

出所：孫本文『当代中国社会学』, 1948年, 勝利出版社公司, pp. 319~327 をもとにして中国社会学会『社会学雑誌』(*The Chinese Journal of Sociology*), 東南社会学会(1930年から中国社会学社)『社会学刊』(*The Sociological Journal*)の各年度版から作表。

孫本文の中国各大学社会学教授姓氏録（1947年、民国36年12月調査）によれば、総計145人のうち、アメリカ留学は74人、フランス留学は11人、日本留学者は10人、イギリス留学は9人、ドイツ留学は4人、ベルギー留学は1人、アメリカ人教授8人、無留学28人である。この数字をみるといかにアメリカが中国人留学生をひきつけたかがわかる。ここに、日本へ留学した10名の社会学教授を挙げるとつぎのようである。

中国社会学への日本の影響を示す一つのインデックスになるので、かれらの中国への帰国後の社会学界での活動をみておこう。資料は、1922年創刊の中国社会学会編『社会学雑誌』(*The Chinese Journal of Sociology*, *CJS* と略す), および1929年創刊の東南社会学会編（1930年

から中国社会学社編『社会学刊』(*The Sociological Journal*, *SI* と略す)である。ただ二つの雑誌とも、1909年から始まった庚子留学でアメリカに留学した帰国者が中心になって活躍している。既に留学生の流れは、日本からアメリカ、フランス、イギリスに移っていた。

- 1, 王 克『中国社会服務事業』(1943年, 商務印書館)
- 2, 李劍華『労働問題与労働法』(1928年, 太平洋書局),『社会学史綱』(1930年, 上海世界書局),『社会事業』(1930年, 世界書局),「社会学在科学上的地位」(*SJ*, vol. 1, no. 1, 1929),「{書評}社会学ABC(孫本文)」(*SJ*, vol. 1, no. 1, 1929),「社会学体系論」(*SJ*, vol. 1, no. 2, 1929),「孔德 {コント} 的生平及其学説」(*SJ*, vol. 1, no. 3, 1930),「{書評} 許德珩的社会学方法論」(*SJ*, vol. 1, no. 4, 1930),「{書評} 崔載陽の近世六大家社会学」(*SJ*, vol. 2, no. 1, 1930),「{書評}林惠祥編 台湾番族之原始生活」(*SJ*, vol. 2, no. 3, 1930),「{書評}浅野研眞著 社会現象の宗教」(*SJ*, vol. 2, no. 3, 1930),「{書評} 川辺喜三郎的社会学原論」(*SJ*, vol. 2, no. 4, 1931),「{書評} 川辺喜三郎的社会学概説」(*SJ*, vol. 2, no. 4, 1931),「{翻訳} 霍布浩斯 {Leonard Hobhouse} 的社会学説」{松本潤一郎著『現代社会学説研究』(1928年)からの訳}(*SJ*, vol. 2, no. 1, 1930),「奢侈生活之社会学的觀察」(*SJ*, vol. 2, no. 4, 1931)。
- 3, 岑家梧「唐代婦女裝飾風俗考」(*SJ*, vol. 6, 合刊, 1948),『芸術社会学』(出版年, 出版社不明)。
- 4, 康宝忠「倫理学」「社会学講義」「社会政策」「植民政策」「中国法制史」「遼君講演録」「膠居詩存」(これは、木橋「中国の第一位社会学家——康宝忠」, 中国社会科学院社会学研究所編『社会学研究』, 1989年3月, 10ページを参照した)
- 5, 劉龔「美国社会学雑誌五月号要目紹介」(*SJ*, vol. 1, no. 2, 1929),「美国社会学雑誌7月号要目紹介」(*SJ*, vol. 1, no. 2, 1929),「外国社会学雑誌要目紹介」(*SJ*, vol. 2, no. 1, 1930),「美国社会学雑誌最近要目紹介」(*SJ*, vol. 2, no. 1, 1930),「社会学之対象及其範囲」(*SJ*, vol. 2, no. 4, 1931),「{書評} 涂爾幹 {デュルケム} 的社会学方法論」(*SJ*, vol. 2, no. 4, 1931),「美国各種社会学雑誌内容紹介」(*SJ*, vol. 2, no. 4, 1931),「齊穆爾 (G. Simmel) 之社会学学説及其批評」(*SJ*, vol. 3, no. 3, 1933),「{書評} 亜貝爾 {アベル} 的德国系統社会学」(*SJ*, vol. 3, no. 3, 1933),「{書評} 顔復礼・高承祖編の広西凌雲瑤人調査報告」(*SJ*, vol. 3, no. 3, 1933),「{書評} 楊成志著雲南民族調査報告」(*SJ*, vol. 3, no. 3, 1933),「{雑誌紹介} 社会的勢力 {vol. 10, no. 1, 1931}」(*SJ*, vol. 3, no. 1933)。
- 6, 劉及辰
- 7, 鄧深澤
- 8, 簡貫三『理論社会学』(1935年, 中華書局)
- 9, 鄭燭燊

10, 魏重慶『社会学小史』（1940年, 商務印書館）

註

- 1) 楊雅彬『中国社会学史』, 1987年, 山東人民出版社, 序。
- 2) 陳樹徳・許妙堯『中国社会学史資料選編』, 1986年, 上海大学文学院（社会学専攻教育用図書）, 序。
- 3) 康宝忠は1903年, 日本に自費留学し, 最初同文書院と経緯学校で日本語と基礎課程を学び, 1906年早稲田大学政治経済科に入り, 1909年に卒業した（木橋, 「中国の第一位社会学家——康宝忠」, 中国社会科学院社会学研究所編『社会学研究』, 1989年3月, 10ページ）, および許妙堯「康宝忠——第一個講授社会学的中国人」『社会』（社会学雑誌）, 上海大学文学院編, 1983年, 第3期, 42～43ページ。
- 4) 楊雅彬, 前掲書, 3ページ。
- 5) 貝塚茂樹『中国の歴史』, 1970年, 岩波新書, 154ページ。
- 6) 韓明漢『中国社会学史』, 1987年, 天津人民出版社, 37～38ページ。
- 7) 留学生数については, 黃尊三著, さねとうけいしゅう・佐藤三郎訳『清国人日本留学日記』, 1985年, 東方書店, 16ページおよび小島淑男『留日学生の辛亥革命』, 1989年, 青木書店, 13ページ。
- 8) 貝塚茂樹, 前掲書, 157ページ。小野信爾『人民中国への道』, 1977年, 講談社現代新書, 105～6ページ。
- 9) 楊雅彬, 前掲書, 29～30ページ。
- 10) 張相文（1867～1933）は日本への留学生ではないが, 1899年から上海南洋公学師範院に勤務していた時に, 同校の日本語教師栗林孝太郎から日本語を学んだ（熊月之『中国近代民主思想史』, 1986年, 上海人民出版社, 309ページ）。
- 11) 熊月之『中国近代民主思想史』, 1986年, 上海人民出版社, 302～318ページ。
- 12) 楊雅彬, 前掲書, 28ページ。
- 13) 韓明漢の『中国社会学史』（1987年, 天津人民出版社）は, 付録に「中国社会学史大事記（年譜）」を作成しているが, かれの記述の2箇所にて誤植と表現不足があることが, 原資料をみることで, わかったので訂正しておきたい。誤植は, 1928年9月「……東南社会学社が成立し……」は「……東南社会学会が成立し……」が正しい。また, 表現不足は, 1930年「全国的な中国社会学社が成立し, もと東南社会学会が出版していた『社会学刊』（季刊）を中国社会学社が引き継ぐ。この刊行物は5巻2号まで〔1937（民国26）年〕出版されたが, 抗日戦争が起こったために停刊になった」のつぎに「1948（民国37）年1月, 当年度1回発行とし, 第6巻合刊として復刊された」を加える。
- 14) 李劍華『社会学史綱』, 1930年, 上海世界書局, 117ページ。

付録 滬東公社の活動について

中華人民共和国成立以前に, 滬江大学 (Shanghai College)——前身はアメリカ南北バプテスト教会が, 1908年に上海楊樹浦で創立したバプテスト教大学である。1915年に滬江大学と改名した——の社会学部を卒業した1913年生まれの老社会学者L先生（77歳）にはじめて会ったのは, 1991年元旦であった。午後3時半, 上海市徐匯区の自宅を一人で尋ねた。日本にいるL先生の教え子のZ氏が手紙で事前に連絡しておいてくれたお陰で, 初対面にもかかわらず, 夕刻まで2時間以上にわたって, 中華人民共和国成立以前の, また最近の中国社会学や社会学者について多くの話を伺った。これ以来, 小生の1991年4月からの上海滞在で, 親しく交際をし

ている。

L先生の奥さんも同じ大学の同じ学部と同級生であり、筆者は1949年以前の社会学の学生になった思いがした。初対面の時、三人で新しい年を祝いしつつ、奥さん手製の春巻をいただいたことに、何ともいえぬ感動をおぼえた。戦前の日本人との付き合いも懐かしい思い出として語ってくれたし、日本の旧友のパーソナリティを語り、また40数年後の今も忘れないでいる、いくつかの日本語も話してくれた。

L先生は、1937年に滬江大学の社会学部を卒業後、1941年まで、同大学付属の滬東公社で主として社会福祉や教育の仕事をしたのち、当時イギリス租界内にあった上海工部局(Shanghai Municipal Council) ①の福祉部門で1942年から1946年まで社会福祉の仕事をした。

後に、奨学金を得て1947年から1949年まで New York School of Social Work, Columbia University で Social Work を学んだ。帰国後、1949年から1952年まで、母校の滬江大学で社会学の講義を担当した。

L先生の1952年以後については、別の機会に譲りたい。ただ言えることは、中国は1952年から1979年まで大学の社会学部を廃止し、社会学の研究を禁止したという、そして1957年の反右派闘争および1966年から10年間続いた文化大革命は多くの知識人を迫害したという大きな歴史的事実があったことである。

ここでは、L先生が奥さんとともに、青年時代に教師として活動された滬東公社の内容について、紹介しておきたい。そのばあい、L先生夫妻からの聞き取り以外に、楊雅彬著の『中国社会学史』（1987年、山東人民出版社）と王康主編の『社会学詞典』（1988年、山東人民出版社）を利用した。

## 滬東公社の活動

社会学教育に伴って、ソーシャル・サービスの実習が始まり、1917年、滬江大学社会学部のアメリカ人教授 D. H. Kulp II ②は、同大学の社会学部、経済学部、教育学部、宗教学部と共同で、上海の楊樹浦の労働者が多く住む地域に「滬東公社」③を設立した。この公社の目的は、一つには社会学部の実習室として、滬江大学の各学部のすべて学生に実習の機会をあたえ、ソーシャル・サービスに携わるようにすることであり、二つには労働者に学習や娯楽を提供することである。

この公社は、滬江大学の付属であり、大学が組織した滬東公社運営委員会によって運営されていた。この委員会は5人の委員からなっている。錢振亜が公社の社長になったこともある。社長の下には、執行委員会が設けられ、教職員全体の選挙によって委員が選ばれた。公社の仕事は教育、体育、社会、宗教、娯楽に別れており、それぞれの仕事は教職員の指導のもとで全学生によって行なわれた。



この外にも、公社は10余りの共同経営の組織をもっていた。それらは滬東商聯会、怡和紗廠、楊樹浦紗廠、班達公司、怡和蛋廠、上海電力公司、祥泰木行、花旗烟公司、女青年会、夏令兒童聯合会、滬東教会、滬江学生自治会である。

この公社の活動は、主に1)教育事業、2)社会事業、3)宗教事業および徳育事業の3つに分けられる。

#### 1) 教育事業について

全日制の学校が、滬江学生自治会と滬東商聯会の共同で運営された。この学校は完全小学校（初小4年と高小2年を合わせ備えた小学校）から初級中学まであり、生徒数は300人余りであった。また、公社の共同経営の工場と共に英語の夜学および労働者の補習学校を開いていた。これらの学校は6クラスにわかれ、実用英語、中国語、算術、常識などを教え、生徒は全部で400人余りで、教員は18人であった。L先生はこの夜学で魯迅の小説を教材にして中国語を教えていた。この夜学には、数人の日本人が学んでいたと、L先生はいう。青年会と共同で社会人女学校が開かれ、必要な常識が教えられていた。また、新聞の閲覧所が3カ所つくられていた。毎週土曜日には、著名人や滬江大学教授を招き学術講演が行なわれた。

#### 2) 社会事業について

社会調査が行なわれた。これは滬江大学の教師や学生が行なった。また、公社の職業紹介担当者が各工場で職業指導や職業紹介を行なった。毎年夏には、衛生・清潔展覧会を開くなどして、衛生運動を進めた。聯合女子青年会が女子先導団を組織し、労働者の家庭の生活改善を行なった。

#### 3) 宗教および徳育活動について

全日制学校、夏季児童義務学校、合唱クラス、查経クラスが設けられた。また、徳育の講演が行なわれたり、サッカー、バスケットボール、ピンポン、武術などのスポーツ活動が行なわれた。

この公社には新劇社や歌舞団があり、日曜日や休暇には大衆娯楽ものが演じられた。公社の年間の必要経費は12,000元余りであり、そのうち90%が自前で、大部分は学費から得られ、財政上の基盤があった。

#### 註

- ① 工部局は、治外法権地区である租界のいわば政府に相当する行政機関であり、1869年に設置された。現在の江西中路と漢口路の交わるところにある。工部局には、政府の各省庁にあたる「局」(Department)と「委員会」(Committee)を柱にして、重層的な行政網が確立されていた。局や委員会には、Finance, Health, Watch and Defense はもちろんのこと、Library, Orchestra といったものまで含まれており、その数は20余りにのぼっていた。このほかにも義勇隊という独自の警察・軍事組織や消防隊までもっていた。

1949年5月の上海解放の際、人民解放軍がまっさきに紅旗と巨大な毛沢東の肖像を揚げたのが、この工部局であった。工部局は中国の民衆の目にはまさしく列強諸国の中国侵略の砦と映っていたので

## 社会学部論叢

- あった（NHK ドキュメント昭和取材班編『上海共同租界』，1986年，角川書店，23～29ページ）。
- ② Daniel Harrison Kulp II は，1913年から1919年まで，滬江大学で社会学を講義した（L先生談）。
- ③ 楊雅彬は，滬東公社を East Shanghai Community と記しているが（王康主編『社会学詞典』1988年，山東人民出版社，288 ページ），L先生は Yangtsepoo Social Center だったという。